

作／田口浩一郎

mongoloi, z 第二回公演作品

吹く小夜嵐

舞台上には上下に二脚のソファ、そしてローテーブルが設置してある。上手より一人の男が大股に歩いてくる。男の名は平岡。その威風はややわざとらしいほどに見える。男は下手のソファに深々と腰を掛ける。そして真っ直ぐに上手を見据える。

後、上手から二人の青年が登場する。先に歩いてくるのが森田青年。もう一方の青年を「青年」と呼ぶことにするが、その外見はどう見ても女である。二人、平岡の前に来ると立ち止まる。

森田、平岡の目を真っ向から見据える。重苦しい沈黙。見かねた青年が森田の肩を叩くと、森田、振り払う。

森田 人の殺し方を教えて下さい。

平岡 …。

森田 刀をどう使えば、失敗なく人を殺せるのですか。

青年 …おい。

森田 誰を殺せば日本のためにもっともいいのでしょうか。

平岡 …彼は？

青年 あ、はい…おい、挨拶を…。

森田 日本でいちばん悪い奴は誰なのでしょう。

青年 こいつは…例の研究会のモンですよ…名を…。

平岡 やる気ありそうだね。

森田 …。

平岡 いい目をしている。

青年 …ええ。

森田 森田です。

平岡 森田君か。

森田 はい。

平岡 掛けたまえ。

森田、一礼をして平岡の正面に座る。

森田 はじめまして。

平岡 やあ、はじめまして。

森田 教えて下さい。

青年 おい…。

森田 人の殺し方を…。

平岡 せつかちだね。

森田 …。

平岡 そんなことはね、これからいくらでも教えてあげよう。君…。

青年 はい。

平岡 あれを持ってきてくれないかな。

青年 …はい。

青年、下手袖に消える。

平岡 …森田君。

森田 はい。

平岡 何をそんなに逸^{はや}っているかは知らないがね…我々は。

森田 …。

平岡 我々はね…ただ一回戦えばいいんだよ。

森田 一回？

平岡 そうだ。

森田 一回でいいんですか？

平岡 一回でいい。

森田 …。

平岡 むしろ…どこまで我慢できるかのほうが重要だ。

森田 …ええ。

平岡 …わかるかね？

森田 ええ。

平岡 どうわかったのか？

森田 僕が欲しいのは勝利じゃない。

平岡 …ほう。

森田 ただ変わればいいんです。世の中が。

平岡 うん。

森田 ただダラダラ闘っていたって誰も驚きやしない。闘いが日常になっちまう。

平岡 うん。

森田 昨日と同じ戦いが、今日起こっても何も変わらないんですよ。むしろ戦えば戦うほど新鮮味が薄れていく。飽きられる。

平岡 同感だね。

森田 ……それよりも……衝撃です。一回の衝撃の方が遥かに重要でしょう。

平岡 ……。

森田 ……そう、考えます。

平岡 ……。

森田 ……。

平岡 ……困ったな。

森田 ？

平岡 察しが良すぎる。

森田 はあ。

平岡 今日、俺が喋ろうとしたことを全部喋っちゃったんだからさ。

森田 すいません。

平岡 謝らなくていいよ。愉快だね。

平岡、にっこりと笑う。森田もこころなしか笑う。

平岡 マスター。

マスター はい。

マスター、銀のトレーを持って上手袖から登場。

平岡 コーヒー。ふたつ。

マスター 豆は？

平岡 なんでもいいよ。

マスター そりゃいかんな。

平岡 え？

マスター 先生たるもの豆にはこだわらないとき。

平岡 マスター、先生はやめて下さいよ。

マスタ え？

平岡 大学時代みたいに平岡でいいですよ。

マスタ そうはいかん。功成り名をなした小説家をさ、まさか呼び捨てに…。

森田 小説家？

平岡 …。

マスタ …。

森田 先生は小説家なんですか？

平岡 …そうだけど。

マスタ へえ。

平岡 君、知らないで来たのか？

森田 はい。

マスタ 三島由紀夫だよ。

森田 はい。

マスタ 小説家の三島由紀夫。

間。

森田 そうですか。

マスタ 君、三島由紀夫を知らないのか？

森田 知ってます。でも、本物には初めて会いました。

マスタ …。

平岡 聞いてないの？ここに来る前に。

森田 「今日はエライ先生に会わせてやる」ってことだけ。一応。

平岡 ふーん、そうか。

森田 …でも、さつきは平岡と。

平岡 あ、ああ。

マスタ ペンネームだよ。ペンネーム。

平岡 本名は平岡公威きみたけ。三島由紀夫はペンネームだ。

森田 へえ。

平岡 この人は大学の先輩だね。

マスタ どうも。(森田に挨拶)

平岡 小説のネタにするようなちよつと下品な話でもね、今日みたいな物騒な話でも平気で受け入れてくれるからさ、いつも通わせてもらってるんだ。口も堅いね。

マスター いや、照れるな。

平岡 しかし、どうも今日は空すいてるね。話しやすくもいいけど…貸しきりみたいだ。

マスター 貸し切りにしておいたよ。

平岡 え？

マスター 大事な話をするってさ、電話くれたろ？

平岡 ええ、まあ。

マスター だから、貸切。

平岡 さすが先輩だ。かなわない。な。

森田 ええ。

マスター、照れて笑う。

マスターじゃあ、豆はブルマンね。

平岡 はいはい。

マスター スフレ食べる？

平岡 食べます。

マスター、にっこりと笑う。

マスター 待っててね。

マスター、機嫌よさそうに上手袖へはける。

森田 いい人ですね。

平岡 はは…結局、豆はあの人が決めちゃうんだよ。

森田 はい。

平岡 機嫌がいいと、勝手に決めちゃうんだ。

森田 …。

平岡 だから楽でいい。こっちで決めなくても、彼が決めてくれるからね。

森田 …。

平岡 ときに…森田君。

森田 はい。

平岡 君はどうして…私の活動に興味を持ったのかな？

森田 探していたんです。行動する組織を。

平岡 ほう。

森田 祖国日本を守るために。思想というお喋りに延々現えんえんうつを抜かす連中じゃなく。

ただ一回、行動する組織をです。

平岡 へえ、じゃあそれが政府要人を暗殺する組織だったり、ビルや線路に爆弾を仕掛けて、民間人もろとも悪人を吹っ飛ばすような、情容赦ないグループであつても…？

森田 構いません。

平岡 いい覚悟だね、君。

森田 はい。

平岡　じゃあ…一人でやりたまえ。

すると、舞台上手から青年が飛び出してくる。

青年　先生！先生！

平岡　おう、遅かったね。

青年　先生…あれが、あれが。

平岡　あれ？

青年　そうです。あれです。

平岡　…そうだ。君、あれはどうした？

青年　無いんです！

平岡　ない！？

青年　そうです…ちよつと目を離した隙に…ああ、武士の魂が。

と、マスターが「おまちどお」といいながら、日本刀とスフレを持って入ってくる。スフレはラウンド型で程よい大きさにカットしてある。

平岡 …。

マスター おまちどお。

マスター、スフレをローテーブルに置く。

マスター いやあ、これ、助かったわ。ありがとう。

マスター、平岡に日本刀を渡す。

平岡 …。

マスター やあ、素晴らしい切れ味。

青年 あんた…まさか。

マスターん？

青年 切ったのか！武士の魂で！そのスフレを！
マスター 切ったよ。

青年 罰当たりな！

マスタ 知的好奇心に負けてね。気になるじゃない。スフレ、日本刀で切ったらどうなるか。

青年 気にならないよ！刀で切ってもスフレはスフレだよ。

マスタ だって、無造作に置いてあるからさ。大事なものならちゃんとしまっとかなきゃ。

青年 開き直ったな！絶対に許せん！男として！

マスタ 男？

森田 先生。

平岡 うん？

森田 僕も気に入りません。

青年 え…。

森田 日本刀でスフレを切るべきではない。

青年 …森田。

森田 日本刀で切るべきなのはヒト…ひいてはその裏にある…悪です。
マスタ …。

平岡 …。

森田 …ご主人は先生に謝るべきだ。いや、刀とそれを作った職人に謝るべきです。
マスタ …。

森田 物にはそれに応じた正しい使い方がある。コーヒーだってそうだ。

マスタ コーヒー？

森田 最高級のブルマンを、ジョッキでガブ飲みされたらご主人どうですか？

マスタ ああ、許せんね。

森田 そうでしょう？

マスタ …。

森田 ね。

マスタ …うん。

間

マスタ …ごめんね。

平岡 …いえ。

マスター 君（青年）にも悪かった。

青年 …あ、いや。そんな…。

マスター じゃあ、コーヒー持ってくるわ。

平岡 あ、はい。

マスター お詫びに君の分もつけてあげる。

青年 すいません。

マスター あと、鞆持ってくるね。剥き身むみじゃ怖いもんね。

平岡 お願いします。

マスター 平岡君。

平岡 はい。

マスター いい弟子持ったな。

マスター、笑いながら上手に退場。

平岡 …森田。

森田 …は、出過ぎました。

平岡、突如笑い始める。

森田 ?

平岡 …マスターはね…水を差しに来たんだよ。

森田 は?

平岡 私は…子どもの頃から貴族趣味の男だった。徹底して。書いてきた文学も、大学生の頃もそうだったし、最近までそうだったんだよ。今の俺とは全く違うんだ。

ところがさ、ここんところ俺が祖国防衛だとか反共産主義だとか言いだしたんでみんな心配してる。「小説に行き詰った挙句、三島が右翼になった」ってね。今日だってかなり物騒な話をしていたし。マスターとしても放っておけなかったんじゃないかな。

青年 じゃあ、わざと日本刀でスフレを?

平岡 うん、茶化したんだよ。

青年 何だ…引つかかったな。

平岡 ああ見えて意外と思慮深んだよ。マスターは。

ここで、上手から呼び鈴の音がする。同時にマスターと二人の人間がもみ合う声が聞こえる。すると、マスターが押される形で、二人の派手な男（男1・男2）が入ってくる。そして、その後ろから和服の女性がしずしずと尾いてくる。

マスター だから、今日は貸し切りだって言ってるでしょう！

男1 うるさいわね！あたしたち先生の友達だって言ってるでしょ！

男2 センサー！いた！センサー！

平岡、三人の顔を見たときたんギョツとする。

平岡 おかあちやま…！

母 ぼくちゃん。

和服の女性(平岡の母)、平岡に駆け寄る。

母 心配するじゃないの。ぼくちゃん。

平岡 おかあちやま。何故ここに？

母 あなた、どんなに遅くなつても、この時間には必ず机に向っている人が…書斎を覗い^{のぞ}

たらぬけの空なんですものね。驚くじゃありませんの。

平岡 そりや、僕だつて大人ですから。夜遅く出歩くことだつてありますよ。

母 じゃあ、書置き一つ残していったらいいじゃありませんか。

男1 そうよ！お母さん、心配したのよ。

男2 もう見ていられなかったわよ。同じ女として。ね。

男1 ね。

平岡 何で君らまで一緒なんだよ。

男1 そりや、連絡があつたのよ。

平岡 連絡？

男2 ダメよ。何でもかんでも同じ手帳に書いたら。

平岡 !

母 お編集者の方に一件一件あたったのよ。ぼくちゃんのお手帳に書いてあったお電話番号を片っ端から。そうしたら、この人たちにつながったもんだから。

平岡 見たんですか!私の手帳を!?

母 だって、非常事態ですもの。

平岡 …。

男1 見られたくないものをポンと放り出しておく方が悪いのよ。

男2 しかし、間抜けね。天下の三島由紀夫ともあるうものが…お母さまに秘密の遊び仲間を嗅ぎつけられて…。

男1 でも、あたしたちで止まって良かったじゃない。

男2 そうね。この先生だったら、もっと変態なキワモノと遊んでも不思議じゃないからね。

男1 ね。この変態ヤロー。

男2 変態ヤロー。

平岡 …。

マスター あのことお母さま？

母 はい。いつも息子がお世話になっております。

マスター あ、こりや…どうも。お初にお目にかかります。わたくし…。

男2 先輩でしょ？先生の。

マスター え？

男1 この間、大声で自慢してたじゃない。

マスター はあ…。

男2 やだ、常連の顔も思い出せないの？

平岡 一回しか連れてきてないよ。

マスター あら、お客さん？

男1 あんた、こんな店、一回来てやったら常連もいいところよ。

マスター こりや失礼しました。

平岡 謝らなくていいよ。マスター。

男2 いいえ、失礼よね。

男1 コーヒーの一杯もおごってくれますでしょうね。

マスター、曖昧に笑う。

平岡 いいよ、マスター。俺がおごるわ。

男2 や！センス、男らしい！

平岡 その代わりに、一杯飲んだら直ぐすに帰ってくれよ。

男1 つれないじゃないさ。

男2 そうよ。ああた(平岡)が男に振られてビービー泣いてた時に、慰めてやったのは一体誰だと思ってるのよ。

森田 男？

青年 森田。(たしなめる)

森田 ？

平岡 …。

母 ぼくちゃん。

平岡 はい。

母 ここはあたしが払うから。(ハンドバックからガマ口を出す)

平岡 いいですよ。

母 息子におごってもらうなんて出来ないわ。お友達(森田と青年)の分も…ね。

平岡 こいつらはお友達じゃありませんよ。

母 め！ぼくちゃん、お友達にそんなことを言って…。

青年 …。

母 こちら(男1・2)にもお礼しなくっちゃ。

男二人 ども。

マスタ じゃ、あのう。コーヒーを…えー…ひとつ、ふたつ…。

母 6つで。

マスタ かしこまりました。

マスター、にこりと笑って上手に退場。母、勝手にスフレをつまむ。

平岡 …。

母 まー、それにしてもお若い友達ね。

森田 友達ではありません。

母 まア…そんなこと言わないで、仲良くしてあげてちょうだい。

青年 あ…いえ、お母様…我々はその…先生の弟子のようなもので。

母 お弟子さん？ああ、文学の？

青年 …まあ、なんとというか…。

森田 まだ弟子ですらないんですよ。私は。

母 あら…。

森田 やる気はあるんですがね…先生は一人で行動せよという。むろん私は一人でもやりませんが。

平岡 …。

母 ダメよ、ぼくちゃん、仲間はずれは。

男1 そうよ！こんなかわいい子をつかまえて。

森田 私はあなたに興味がある。

平岡 …うん。

森田 仲間にして下さい。

平岡 …。

母 仲間にしてあげて。

男2、手拍子始める。突如巻き起こる“仲間コール”。森田、平岡をじっと見据える。

平岡　　いいよ。

森田の表情、軽く緩む^{ゆる}。場はやや和気を醸^{かも}し、男1・2などはワケも分からないのに手を叩いて祝福している。

青年　　森田！おめでとう！

森田　　ありがとう。

男2　　これであたしたちも仲間ね。

青年　　えー…。

母　　私も…仲間？

男1　　仲間に決まってるでしょ。やだもう、お母様ったら。

意味のない哄笑。平岡と森田だけは笑っていない。

男1　でもさあ、お祝いの席にお酒がないってのはどうなのよ。

男2　そうよ！お酒がなきや！

ここにマスター、トレーにいくつもコーヒーカップを乗せて登場。

男1　あ、ちよつと店長！

マスター　はいはい。

男2　お酒出して、お酒。

マスター　うち、純喫茶だよ。

男2　えー、無いの？

マスター　やるなら他所よそでやってよ。

男1　あたしブランドー。

マスター　だからないって。

男2 よおし、じゃあ買い出し行きますよ！あなたのおごりで。

マスター え！

男1 先生の先輩なんですよ！

男2 たまにはおごってやんなさいよ！

男1・2、両脇からマスターを固めてズルズルとひきずってゆく。

マスター ちょ…こぼれる。

男1 さ、近所の酒屋教えなさい。

マスター 平岡君、この人たち何とかして…。

男2 お酒飲みたい人おー。

全員挙手。

男1 はい、じゃあ6人分。

マスター 裏切り者お！

男2 あんたの分も買えばいいじゃない。

マスター 放せ！最高級のブルマンが冷める…！

マスター、男1・2ともみ合いながら退場。この間、母は一心不乱にスフレを食べ続ける。

平岡 私に興味があるといったな。

森田 はい。

平岡 だがね、君…私のグループでは、他者と群むれることでしか行動出来ない人間を必要としないのだ。

森田 僕がそうだと？

平岡 そうじゃない。ただ…君の言い草を聞いてみるとね…依存心を感じるんだよ。行動する組織を探してただの…私に興味があるのと…人に頼ろうとする意識しか感じない。

森田 …。

平岡 君が所属している…その…なんだっけ。

青年 研究会です。早稲田大の国防部と申しまして…。

平岡 ……そう、その…それみたいなの…そういう組織じゃないんだよ。我々は。毛色の変わつた学生運動ぐらいに考えられると…迷惑なんだ。正直。

森田 僕は…人に頼るのは好きじゃないです。ただ…。

平岡 ……。

森田 人は好きです。

平岡 ……うん。

森田 日本人は…愛すべき人たちだと思います。好きですよ。日本人。今後とも…愛される人々であつてほしいと願っている。…だから。

平岡 だから？

森田 悪いやつは斬ります。

平岡 うん。

森田 群れるつもりなどない。一人でもやる。

平岡 ……。

森田 ……ここに来たのは…先生に興味があつたから。…日本を守ろうという気持ちを持つた若者を、先生が集めておられると聞いたからです。…国のため…死ぬことも、殺すこ

とも…いとわぬ若者たち。…そういう人を…僕が、好きだからです。

間

森田 先生は、男が好きなんですか？

青年 森田！

森田 …。

青年 謝れ！せっかく仲間にもらったのに…！

平岡 好きだよ。

青年 先生…。

平岡 僕はホモだからね。

母 ホモですものね。

平岡 好きだよ。男。でもね…。

森田 …。

平岡 誰でもいいってわけじゃない。

森田 僕は好みですか？

青年 お前は…！また！

平岡 不躰ぶしつけだなあ、初対面で。

青年 そうだ！失礼にもほどがあるぞ！森田！

平岡 …好みだよ。

青年 え！

平岡 …しかし安心したまえ。「仲間」には手を出さんから。

青年 当然ですよ！先生！

森田 良かった。

平岡 ん？

森田 先生の好みで。

青年 …。

森田 じゃあ、僕は気に入られたってことですな。

平岡 …まあな。

森田と平岡、笑う。

青年　しかし、先生…。

平岡　何だ。

青年　もう…。「仲間」…いや、同志の前でそのような発言は慎つしんでください。

母　どうして？

青年　え？

母　どうして好きなものを好きと言っちゃいけないの？

青年　そんな…だつて…我々は…これから日本を守ろうというのに…リーダーがホモだなんて…ホモだなんて！

母　ホモじゃ何でいけないの？

平岡　…おかあちやま。

母　私はぼくちゃんに嘘なんか吐ついて欲しくないわ。あなたにも（青年）…あなたにも（森

田）…お友達にはみんな…ありのままのぼくちゃんを好きになつてもらいたいのよ。

青年　…。

母 第一、あなた方、ぼくちゃんのお弟子さんでしょ？

青年 ……はい。

母 世間体やなんか気にして、偽った姿のぼくちゃんについて行くことなんて思う？

森田 思いません。

母 そうよね。

青年 でも、ホモ…。

母 真のお弟子さんなら、ホモのぼくちゃんにこそついて行くべきじゃなくて？ホモのままのぼくちゃんに。

青年 ……しかし。

母 それともあなたはぼくちゃんが嫌いなもの？ホモだから？

青年 嫌いなものか！それどころか愛している！

平岡 ……。

青年 ホモの先生が好きだ！

母 よく言ったわ。

青年 しかし、先生…教えて下さい。先生こそ僕をどう思っているんですか！

平岡 は？

青年 何だか…さつきから森田ばかりかわいがっているじゃありませんか！

平岡 …そりやまあ。

青年 何故です！今日会ったばかりの森田に…僕のがつきあい長いのに！

平岡 付き合いの問題じゃ…。

青年 世間が認めなくたって構わない！後ろ指を指されようと…だから先生、僕を愛し

て下さい！

平岡 無理だよ。

青年 何故です！

平岡 だつて…君、女じゃないか。

青年 …な！

平岡 …なあ。

森田 はい。

青年 男だ…僕は男だ。

平岡 僕は男が好きなんだから…。

青年 …だから。

平岡 君は女だ。

青年 違う…違う。

森田 …。

青年 僕は男だ…そしてホモだ…。

森田 …落ち着いて。(気遣って、青年の背中をさすろうとする)

青年 触るな！(森田の手を払いのける)

森田 …。

青年 お前なんか、連れてこなきゃ良かった！

青年、上手袖に走り去る。

森田 待つて…！

平岡 追うな。

森田、一瞬躊躇するが、平岡の制止を振り切って上手袖に走り去る。舞台上に残される平岡と母。

母 …複雑ね。

平岡 ええ。

母 世間的にはあの娘のほうこが正しいのね。

平岡 彼女が…私のことを愛しているというのは…気が付いていました。しかし、私は彼女

を愛することができなかつた。ホモだったからです。

母 ええ。

平岡 彼女は…私に合わせて自分を変えてしまつたんです。自分を男だと思ひ込み…ついに

はホモセクシユアルだと自覚しました。…やがて、私は愛国精神に目覚め…そして、彼

女も…。

母 …。

平岡 彼女は…あつちこつちの大学の愛国青年を狩り集めてきては私に紹介してくれる。そ

れ自体…助かっているんですがね。今日も…いい男を連れてきてくれました。

母 悲しいわね…尽くしても尽くしても…。

平岡 ホモですからね。私が。

ここで、酒瓶を抱えた男1と男2、マスターが帰ってくる。マスターは女装させられている。

男1・2 ただいまあー♪

マスター ただいま…。

平岡 あ、おかえり。

男1 もう、しこたま買ってきたから。アルコール。

男2 しこたま。うふふ。

男1 はい、ビール。ビール。ブランデー。ビール。ブランデー。ブランデー。ブランデー。ブランデー。

男2 ブランデー。ブランデー。ブランデー。ブランデー。ブランデー。

テーブル上、次々に酒瓶が並ぶ。

平岡 ちよつと極端じゃない？

男2 いいじゃないさ。みんな好きでしょ。ブランデー。

平岡 …まあ。

男1 あれ、そういえばあの色男はどこ行ったの？

平岡 ああ、森田なら外へ。

男2 そうなんだ…。ちょっと狙ってたのに。

男1 ダメよ、ああた。あの子は先生にぞっこんなんだから。

男2 ええ！そうなの！

男1 目を見ればわかるじゃない。

男2 いや！男同士で恋愛なんて！変態じゃないの！

平岡 …。

男1 あら、そういえばお嬢ちゃんもいないのね。

男2 なあに、寂しいわねえ。仲間になつたばかりなのにみんな帰っちゃったの？

マスタ 平岡君。

平岡 あ、おかえりなさい。

マスタ これ、どうしたことだい？

平岡 似合ってますよ。

マスタ いや、そういうことじゃなくてね。この人たち(男1・男2)いつもこういうの？

男1 カワイイでしょ？

男2 酒盛りのホステスがオジンじゃ殺風景だからさ。

男1 着せかえてあげましたあ☆

マスタ …。

平岡 あきらめた方がいいですよ。僕も散々着せ替え人形にされましたからね。昔。

マスタ 平岡君、付き合う人考えた方がいいよ。

男2 ほら、じゃあ、ああた(マスター)、グラス出して。

マスタ え、うちのグラス使うの？

男1 ケチなこと言わないのよ。仲間でしょ。

マスタ …はいはい。

男1 それえい、キリキリ動くう！

マスターと男1、上手に退場。

男2 じゃあ、あたしその間にあの二人、捜しに行ってくるわ。

母 ありがとう。気が利くわね。

男2 お母さま…では後ほど。

平岡 気をつけて。

男2、手を振る。上手に捌ける。
間髪入れず、上手袖からマスターが入ってくる。マスターはトレーに台ブキンを持つている。舞
台中央に近付くと、スフレをトレーに上げていそいそとテーブルを拭く。その間、母はマスターの
顔をじつと見ている。

マスター あのだ…。

母 あ、はい。

マスター 私の顔に何か付いてますか？

母 いえいえ。

マスター …。(にっこり笑う)

母 …。(にっこり笑う)

否定しつつも、母、マスターの顔をじつと見続ける。

母 …。

マスタ やつぱり見てますよね。

母 ええ。あの…。

マスタ はい。

母 どこかで…お会いしましたかしら。

マスタ …ええ。(ニコリと微笑む)

母 まあ、やつぱり。

平岡 あの時だね。

マスタ 覚えていてくれたんですね。うれしいなあ。

平岡 一回ね。来たんだよな。ウチに。

マスタ 本当によく覚えておいででしたね。言おうかどうか迷ってたんですよ。

母 まあ、お人のわるいこと。言ってくればご挨拶のひとつも…。

マスタ いや、大学のときに一度遊びに行っただけですからね。

母 あの時は…確か赤いシャツだったかしら。

マスタ え…ああ、そうでしたっけ。

母 じゃあ、赤いシャツじゃなきゃ分からないわよ。

マスタ ああ…はあ。

母 お人がわるいわね。

平岡 お母ちゃま、無理を言っちゃいけませんよ。誰だって大学生のままじゃられないんですから。

母 それも、そうね。

平岡と母、笑う。戸惑うマスター。

マスター しかし、あのときお母さんが出してくれたコーヒー。あれは美味しかったなあ……。

母 いやだわ。プロだと知ってたらあんな素人コーヒー出さなかつたわよ。

マスター いやいや、あの当時は私もただの大学生でしたからね。しかし、確かにいい豆を使っていた。抽出の温度、挽きの粗さ、どれも完璧でした。

母 誉めすぎよ。

マスター 誉めすぎなもんですか。

平岡 思い出がコーヒーを美味しくしている。そういうことだつてあると思うなあ。

マスター 聞き捨てならないな。それじゃあ、あの美味しかったコーヒーの味は僕の思い込みだけだつたつていいのかい？

平岡 いや、現にそういうことだつてあると思うんだ。

母 そうね。そうじゃなきゃあなた、こんなただの小母おぼさんが淹れたコーヒーが、そんなに美味しいなんてね…あり得ないわよ。

マスタ いや、納得できませんがね…しかし、思い出のかがやきがコーヒーを美味しく感じさせているって…これ、嫌いな説じやない。

平岡 実際、あの時は楽しかった。

マスタ ああ、二人とも若くてね。君も私も。

平岡 …。

マスタ また、あの頃に戻りたくはないかね。若かったあの頃にさ。

平岡 若さか…大嫌いだった。純粹で、尊大で、個人的で…そういつた激しい思い込みが。

マスタ ああ、君は、そういうのは…そうだろうな。

平岡 でもね…最近はあながち…。若さか…。

マスタ …。

平岡 今は私が…そうだ。うん。

ここで、男1が上手袖からマスターを呼ぶ。マスター、母に一礼。「はいはい」といいながら上手に捌ける。

上手袖から半ベソをかけた青年と森田、男2が入ってくる。

森田 ただいま戻りました。

平岡 お帰り。

青年 …。

平岡 お座りよ。

平岡、目の前のソファを勧める。青年、座る。

平岡 落ち着いたかね。

青年、頷く。すると、上手から男1とマスターが下らない口論しながらグラスを持って入ってくる(グラスにはすでに酒が注いである)。マスター、また違うドレスを着けている。

平岡 マスター。

マスター 何だい？

平岡 ホットミルク下さい。

マスター たまにはコーヒーを出したいなあ。うちは純喫茶…。

平岡 ホットミルクでいいです。

マスター はいはい…。

マスター、グラスを男1に渡して渋々戻っていく。

平岡 ちょっと待っててよ。温かいミルクでも飲めばまた落ち着くから…。

青年 先生！

平岡 うん？

間。周囲に何ともいえない緊張が走る。

青年 先生のことは…諦めます。

平岡 うん…あ、そうか…。

青年 ホモの女なんて…先生も気持ち悪いでしょ。

男2 それ普通なんじゃないの？

青年 そのかわり…森田を。

森田 え。

青年 こいつを幸せにしてやって下さい！

平岡 は？

青年 森田は…いいやつですから。

森田 何言ってるんですか！

青年 さつきね…外で散々慰なぐさめてもらったんですよ。この森田に。「僕が先生だったら絶対

あなたと付き合うんだけどなあ…」とか「頑張ればきっといつか男になれるよ…」とか…くう。泣かせるやつです。私が女だったら絶対こいつにホレてる…先生！

平岡 うん？

青年 森田も先生にホレていますよ。

森田 …あ、いや。

平岡 …。

青年 …こいつは一本筋が通っている。一人でも行動するという言葉に嘘はないでしょう。きっと先生の力になります。

平岡 …ああ。

青年 先生は…私の愛に気づきながら…ずっとはぐらかしておられた。私を突き放すことも抱きしめることもせずに…。先生は…。

平岡 …。

青年 先生こそ、一人で決めるべきです。

平岡 なに…！

青年 あなたは優柔不断だ！あなたは一人では何も決められない！金箔きんぱく付きの臆病者だ！

平岡 君…！

青年 祖国防衛だつて…取り巻きなんぞ集めずに一人でやったらどうですか。いつも、「一人で決めて、一人で行動」を口にしてる先生が…仲間を募るだなんて矛盾してますよ。

平岡 …。

青年 行動を起こすなら一人でやって下さい。それも…今すぐに。

「ここで、マスタが上手袖から再び登場する。また別のドレスを着ている。

マスタ はいはい…ホットミルクですよ。

青年 さよなら…

マスタ え？

青年 言いたいことを言ったらスッとなりました。

平岡 …。

マスタ ミルクは？

青年 いらない！森田！

森田 はい。

青年 先生を頼んだぞ！

青年、吹っ切れた笑顔を残して上手に走り去る。追おうとする森田。

平岡 追うな！

森田、今度は思いとどまる。

マスタ ミルク…。

平岡 私が…もらいます。

平岡のもとにミルクを運ぶマスター。何とも気まずい空気の中、一同黙り込む。平岡、ミルクを一服。ため息。

平岡 ちよつと…ブレンダー入れてもらえます？

男1 ああ、はいはい。

男1、ブレンダーを平岡のミルクに注ぐ。この間に男2、他のメンバーにグラスを回す。

男2 じゃあさ、仲間が一人減っちゃったけど、パーティーでも始めましょうか。

男1 そ、そうね…イヤなことはパーッと忘れましょう！

男2 じゃ、先生…カン、パーイ！

男2、平岡のカップにブランドーの瓶をカチンと合わせる。

一同 カン、パーイ。(平岡と森田を除く)

森田 先生！

平岡 …。

森田 すぐにやりましょう！

森田、平岡に近づいて日本刀を奪い取り、握った柄をその面前に突き付ける。

森田 酒を飲んでいる場合ではありません。

男1 何よ、あんた無粋なやつねえ。

男2 先生は今、傷ついているの。ハートブレイキングなのよ。

森田 教えて下さい！

平岡 …。

森田 誰を殺せば日本のためにもっともいいのでしょうか！

平岡 …。

森田 日本でいちばん悪い奴は誰のですか！

平岡 …。

森田 今、斬りましょう！

マスタ 平岡君。

平岡 はい。

マスタ 君は一体どこまで行くつもりなんだね？

平岡 は？

マスタ 文学者の君、愛国者の君、ホモの君だつてそうかもしれない…こりやみんな君の作った君のイメージだ。世間の人はこれを信じている。天才の君を。ホモセクシユアルな君を。

…君はね…君自身の作ったイメージを忠実に演じてきたんだ。違うかね？

平岡 …。

マスタ 今度はどこまで行くつもりなんだ？彼の差し出す剣を取つて、悪人でも切りに行く

かね。国会にでも乗り込むかね？愛国のヒーローとなって。ん？

平岡 …。

マスタ 死ぬぞ。

平岡 …。

マスタ イメージに殺されるんだ。

平岡 …森田。

森田 はい。

平岡、森田の差し出す刀を取る。平岡、やや悩んだような顔をする。

平岡 斬れ。

平岡、刀の柄を森田に差し出す。

平岡 いちばん悪いのは俺だ。

森田、平岡の目をじっと見つめているが、ややして刀の柄をつかむ。平岡、舞台センターで坐る。^{すわ}
森田、意を決する。そして、刀を構える。

男2 ひっ！！

男1 ちよつと！やめなさいよ！

マスタ 平岡君！

平岡 ……止めないでください！

マスタ ……

平岡 ……ここで死ななければ…私は彼(森田)を殺してしまうでしょう。

森田 ……

平岡 いや…彼だけではない。私の理想に…戦いに…美に力を貸そうという大勢の若者た

ちが…犠牲になるのです。…私には堪えられません。さよなら…おかあちやま。

母 ……ええ。

男1 お母さま！

男2 止めてあげて！

平岡　彼女がこの場にいないのは幸いでした。私の後など追わぬよう…気遣い願います。

振り返つて、母の目を見る平岡。母、ニコリと笑つて頷く。動揺する男1・2。

平岡　森田。

森田　はい。

平岡　七首あいくちなどないゆえ、略式にて切腹の儀を行う。

森田　はつ。

平岡　俺がこうして、刃物を腹に当てる振りをする。そいつを横に引くから、それを合図に思い切り刀を振りぬけ。(トントンと首を示す)

森田　わかりました！

平岡、張りつめた空気の中、正座をして居住まいを正す。しばし瞑想を行い、七首を取るふりをする。

マスタ あ、平岡君！

平岡 何ですか。

マスタ じ…辞世の句とかはないのかね。

男1 そ…そうよね。

男2 辞世の句は必要よね。

平岡 …ふむ。

マスタ 生きる希望に満ちたやつをひとつ頼むわ。

平岡 そうですね…。

男1 うんうん。

平岡 散るをいとふ 世にも人にも先駆けて 散るこそ花と 吹く小夜嵐

男2 死ぬ気満々じゃない。

平岡 …では…いざ！（刃物を腹に当てる振り）

森田 先生！

平岡 何だ！

森田 …失敗してもいいですか。

平岡 なに？

森田 私、真剣まけんを握るのは初めてでありまして。

平岡 …。

森田 途中で止まったり、肩や頭を切りつけた時にはご容赦願いたく。その時は…やり直させて下さい。

平岡 やり直しか。

森田 はい。

平岡 痛いかな？

森田 痛いと思います。

平岡 苦しいかな。

森田 苦しいと思います。

平岡 …。

森田 …。

平岡 また今度にしようか。

何だかちよつと落胆した空気が舞台を支配する。森田、微笑んで刀を納める。

男1 やめてよおもう、先生え。

男2 本気で心配したじゃないのさ。

平岡 男には引く勇氣も必要だよ。わはは。

男2 偉いわあ。

母 ∴。(軽く微笑んでいる)

マスタ 平岡君∴。

平岡 いや、臆したわけでは∴。

マスタ もう、やめなよ。

平岡 は？

マスタ 何が満たされないのかね？君には文学がある。名声がある。仲間だっている。お母さんもいる。∴何が満たされなくて、そうして日本刀を振り回しているのか？どうして愛国運動なんだ？君が守るべき祖国はこの仲間たちだよ。

男1 そうよ。

男2 私、先生のこと大好きよ。

平岡 ∴みんな。

マスタ 危なつかしいことは今すぐやめるんだ。そして、ここにいる仲間たちと祝杯を…いや、

コーヒーを飲んで文学を語り合おうじゃないか。

平岡 …。

マスタ な。

マスター、手を差し出して握手を求める。平岡、躊躇ためらいながらもその手を取ろうとする。

森田 もう、終わりですか。

一同、森田を注視する。

森田 終わりなら…この刀はお返しします。

森田、平岡の胸に日本刀を押し付ける。茫然ぼうぜんと立ちすくむ平岡。森田、なかなか刀を取ろう

としない平岡の胸に、再び「ぐつ」と刀を押し付ける。平岡、震える手で刀を取り、弱弱しく抱える。

平岡 …。

森田 コーヒー、ごちそうさま。

マスタ …ああ。

森田、うなだれる平岡を見つめる。そして、やや寂しそうに眼を伏せる。

森田 帰ります。

森田、軍人のように廻れ右。舞台を退出しようとする。

平岡 待て。

平岡、森田の腕を掴む。そのまま胸に引き寄せ抱擁。

男2
いや…！

平岡 …待ちなさい。

森田 …いやです。

平岡 待てと言っている。

森田 …用はないでしょう…お互いに。

平岡 …死んでもいい。

森田 は？

平岡 お前と死んでもいいと言っている。だから、ちょっと待て。

森田 待たない。やるやると言って、今やらない人間を僕は信用しない。

平岡 やる。だが今はやらない。

森田 何故。

平岡 順序つてもものがある。

森田 言い訳ですね。

平岡 準備も必要だ。

森田 待てません。

平岡 4年…待て。

森田 ダメです。

平岡 3年なら？

森田 いやです。

平岡 2年は？

森田 お話にならない。

平岡 犬死するぞ。

森田 覚悟の上…。

平岡、森田が言い終わらないうちにキス。

男2 ひあ！

男1 やめてよ先生！

男2 これじゃ変態じゃない！

「ここで、上手より息を切らせた青年が登場。「先生！僕やつぱり！」といいながら走り込んで

くる。そして、平岡と森田のキスを目撃してしまう。

青年 あ…！

一同 …。

青年 見たくなかった…。分かってたけど…。見たくなかったあー！！

青年、泣きながら上手に走り去る。

男1 あ！！

男2 待ちなさいよお！これは…。そんなんじゃないから！

男1・2、青年を追って上手袖に退出。と、森田、平岡を下手に突き飛ばす。自身は上手に移動。マスターの腕に受け止められる。

森田 はあ…はあ…。

マスター まだやる気かね…。

平岡 …。

マスタ 多くの人間を傷つけることになるぞ。

平岡 …。

マスタ …まあ、君らしいがね。昔から小市民的というか…卑屈な現実主義が大嫌いだったから。君は。

平岡 …。

マスタ しかし…「死んでもいい」か。なんだか芝居がかつてるね…はは。「お前と死んでもいい」…フフフ。どうすんの？爆弾テロでもやるのかい？

平岡 …いえ。

マスタ そうか…じゃあ、この彼と一緒に米軍基地にでも斬り込むのかな。日本刀でも提さげてさ。

平岡 …いえ。

マスタ 確かに衝撃はあろうと思うけどね。やめた方がいいよ。君が死んで…マスコミが騒いで…日本中議論になる。…そして、みんな三ヶ月で忘れるんだ。いや…そんなに覚えてるかな。あとは、君の文学全集でも出てそれでお終いだよ。巻末に遺稿集でもつけてさ

…出版社が少々儲ける。…それだけさ。

平岡 …。

マスター な、やめとけ。

この時、森田がマスターを突き飛ばす。驚くマスター。

森田 やめてどうなりますか。

マスター え？

森田 また、昨日までと同じく、何となく自分の国に失望しながら生きるのですか。冷笑を浮かべながら。

マスター 別に失望なんて…。

森田 先生はどうです。

間。

平岡 失望はしていない。

森田 …。

平岡 … 失望したくないだけだ。

マスタ … 平岡君。

森田 やるんですね。先生。

平岡 … やる。

マスタ 痛いよ。

平岡 え。

マスタ 死ぬんだろ？ 彼と。

平岡 その積もりです。

マスタ 人を傷つけて死のうつつんだからね。楽な死にはできないよ。

森田 覚悟の上です。ね。

平岡 …。

マスタ 機動隊に警棒でボコボコに殴られるかもしれない。催涙ガスを撃ち込まれるかもしれない。

ない。最悪、銃で撃たれたりね。苦しむよお。何時間も。死にきれりやいほうで…。それとも、さつきみたいに切腹すのかな？ 介添えは彼がやるの？ 痛いぜえ。首の途中で刃が止まったりしてさ…。

平岡 …延期にしようかな。

マスタ そうそう、それがいい。無期限延期。

森田 先生。

平岡 うん？

森田 殺します。

平岡 は？

森田 ここまできて先生が何もしないようなら、僕が先生を殺しますよ。

平岡 …。

森田 人の純潔を奪ってにおいて、イヤイヤは許しません。

マスタ 純潔？

森田 ほら…キス。

マスタ なんだそりや。

森田 これで僕もホモの仲間入りだ。

マスタ フン、何がホモだ。君は男を愛せるのかね？

森田 僕は…女好きです。

マスタ ほらみろ！ホモをなめやがって！そんなことを口実に平岡君を危険に巻き込もうな

んてそうはいかないからな！

森田 でもね…先生ならば愛せる。

平岡 ……！

森田 あなた（平岡）は、私の大嫌いな臆病者です。

平岡 ……。

森田 しかも、虚勢を張っている。その臆病を隠すために…。

平岡 ……ああ。

森田 臆病で嘘つきだ。

平岡 ……。

森田 だが、真剣です。あなたは必死に演じている。愛国者たらんと、大物たらんと。臆病に立ち向かおうと必死に演じる姿が真剣で、愛せるのだ。

平岡 ……森田。

森田 先生、お願いがあります。

平岡 何だ。

森田 僕を、殺して下さい。

マスク なに？！

森田 もし何か事が起こったら…私は日本のために先陣を切って戦います。そして必要なら腹を切りましょう。その時は…先生が私の首を切るのです。

平岡 …いいだろう。

森田 ありがとうございます。

平岡 しかし、困ったな。

森田 …は。

平岡 お前が先に死んでしまったら、誰が俺の首を刎^はねるんだろう。

するとここで、上手より男1・2に両脇から支えられる形で青年が登場。俯いて、泣き止んだばかりなのか時折しゃくり上げている。

男1はなぜか蝶ネクタイ、男2は花嫁用のベールとブーケを身に着けている。

男1・2 ただいまあ。

平岡 じゃあ、お前(青年)がやってくれ。

青年 …は？

平岡 俺が切腹するとき、介錯を頼みたい。

青年 頼みごとですか？先生！（突然笑顔になり、両側の男1・2を跳ね飛ばす）

平岡 頼みごとだ。

男1 何よもう…。

男2 いきなり立ち直らないでよねえ。

青年 私でよろしいのですか？

平岡 君が適当だろう。

青年 わあ、先生に引導を渡せるなんて。感激です！

平岡 …引導。

マスタ お帰り…。

男1 あ、ただいま。

マスタ 遅かったじゃない。

男2 ああ、ごめんなさい。

男1 このお嬢さんがなかなか立ち直ってくれなくてさ。

男2 でも現金なもんよね。

男1 好きな男に頼みごとでもされれば、もうニコニコしちゃって。

マスタ その…それは？(ボールやブーケを指さす)

男2 これえ？

男1 元氣出してもらおうかと思つてさあ。

男2 ちよつと氣分出してみました☆

男1 こんな二人でも愛し合えるんだからさ。

男2 そうよ、あんたにも新しい愛が見つからないはずはないってね…。

マスタ 愛し合える…あ、二人とも…付き合つて？

男2 あ、ご挨拶遅れました。

男1 私たち、来年…。

男1・2 結婚しまあす。

平岡・マスタ 結婚?!

男2 あら、意外？

マスタ うん、まあ…。

平岡 結婚というのは君たち、愛しあう男と女がだねえ…。

男1 そんなこと知つてるわよ。

平岡 いや…日本の現行法では男と男は結婚できないはず…。

男1 …何言ってるの？

マスタ …。

平岡 …男の子、挙手。

男1、手を挙げる。

平岡 じゃあ…女の子。

男2、手を挙げる。

平岡・マスタ ええ！

男2 何、失礼ね。

平岡 君、女だったのか？

男2 そうよ。

青年 先生、知らなかったんですか？

平岡 ああ。

男2 やだあ、付き合いい長いのに。

男1 失礼しちゃうわね。

男2 ね。

母 おめでとう。

男1 あら、やだ、お母さま。

男2 幸せになりますう。

平岡 ああ…頭痛くなってきた。

母 ぼくちゃん…。

平岡 はい。

母 ぼくちゃんは幸せね…こんなに素晴らしい仲間に囲まれて。

平岡 …ええ。

マスター 素晴らしいもんですか！

全員の視線、マスターに集まる。戸惑うマスター。

マスタ 自殺や殺人をすすめる仲間の何が素晴らしいんですか！

平岡 いや、自殺じゃないんだよ。マスター。切腹…。

マスタ うるさい！死ぬことには変わりがないだろう！それも、むごたらしく…。

平岡 国を守るためには必要なことです。

マスタ 国？おいおい…平岡くんらしくないなあ。君はもつとこう…神経質でさあ。「若さ」、

とか「国」、とか大雑把な価値が大嫌いだったじゃないか。

平岡 ああ…そうでしたね。

マスタ そうでしたじゃない。今もそうだ！

男2 何よ。決めつけることないじゃないさ。

マスタ あのね、人間はそう簡単には変わらないんだ。ひ弱で、神経質で、繊細なホモ。これが平岡君の正体だ。祖国だの防衛だのは、斬新なテーマだからって面白半分に手を出したところが引っ込みつかなくなった。そうなんだろう？

青年 人間は変わることだってありますよ！

男2 そうよ！変わるのよ！

マスタ 黙れ！じゃあ、お前(男2)は平岡君が腹切って死んでもいいんだな！

男2 それは…。

マスタ ひ弱で、繊細で、夢見がちなホモ。これが…これが私の愛した平岡君なんだ。

男2 愛した…？

青年 ご主人、あなたも…。

平岡 …。

マスタ その物騒な連中と手を切って、早く私の許に戻って来るんだ。そしてまた、二人あ
の日のようにコーヒーを飲もう。

平岡 お断りします。

マスタ …なに。

平岡、目線を森田に投げる。二人、目を合せほほ笑む。

平岡 ここでの私は文学者・三島由紀夫ではない。一人の愛国者、平岡公威です。

青年 先生！よく言っておきました。

平岡 長いこと…ありがとう。マスター。

マスタ ……そんな。

マスター、崩れ落ちる。

平岡 森田。

森田 はい。

平岡 俺はこれから一切迷わん。国を護る。生命という価値を超えた、その絶点に向かって一気に駆け上がるつもりだ。…ついて来られるか。

森田 はい。

平岡 では、死ね。

森田 はい。(にっこりと笑う)

平岡、森田を床に引き据える。日本刀を構える。

男2 ひいいい！

男1 またあ、やめなさいよ。

マスター それ以上、行くな。

平岡 行きます。

マスタ …行くな！

平岡 …。

マスタ 死ぬぞ。

平岡 …おかあちやま。

母 なあに？

平岡 …ごめんね。

母 いいわよ。好きなことをなさい。

平岡 森田、俺は今よりお前を殺す。…忠義とはどの道死ぬことだ。行動するとは、すなわち国の今ある姿を壊すということ。今あるお国の姿にケチをつけるのだから…。これは不忠だ。死ぬしかあるまい。…しかし、行動なき忠義など…これも忠義ではない。無意味であり不忠の極み。やはり死ぬべきだ。

男1 何言ってるのよ！

男2 先生の言ってることもう全然分かんない！

平岡 君らには永久に分からん。

男1 いいじゃない！先生、お金あるんだから。

男2 才能もあるし。

男1　　：遊ぼうよ。

平岡　　お前は俺についてくるといった…忠義を示せるか。

森田　　はい。

平岡　　今ここで死ぬことは…無意味だ。それでも、いいか。

森田　　はい。

平岡　　よし、最高の忠義を見せろよ。

男2　　（青年に）ひあああ！先生を止めて！

青年　　静かにしろ！

男2　　ええ！

青年　　見届けるんだ。

平岡　　死ね。

平岡、刀を振り下ろす。母以外は思わず目を伏せる。刀は森田の首ギリギリの所で止まる。

平岡　　貴様の忠義、見届けた。

全員、顔を上げる。平岡に対して視線を集中。

平岡 死を賭した、行動のその朝までお前の命は預かろう。

マスタ ……思いとどまって……くれたのか。

森田、振り返り、抗議するように平岡を睨む。平岡、優しい目をする。

平岡 その日の朝には、俺も一緒に死ぬから。

平岡と森田、視線を客席に移す。睨む。

平岡 期して待つべし！

完